

# 「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

## 「漢字の書き方への支援」

○漢字の書字の習得が困難な要因と支援

## 1 眼球運動が苦手

注目すべき箇所を見失いやすいので、線が2本のところを3本書いたり、線をはみ出して書いたりして、見本と見比べて同じように書くことが難しい。  
→見本の漢字の注目すべき箇所を見失わないように、なぞり書きで学習する。  
→形の似た漢字を提示して、間違いを探す課題に取り組む。



## 2 視覚的な形態記憶が苦手

見本の漢字を手元のノートに視写する際、一度視線をはずすと、見本の漢字の形態を保持することができずに誤写してしまう。  
→漢字の形態を1画ずつ覚えていくように視覚的な形態記憶を段階付ける。  
→漢字の形態を言語化する。例：「頭」は「おマメさんに イチノメハ」

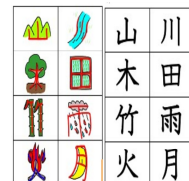
## 3 漢字のまとまりを見付けるのが苦手

偏と旁のように漢字を構成するパーツ（例：「男」→「田」と「力」）を分けることができずに、一つの図形として覚えようとするので、画数が多くなると複雑な図形を覚えるような状況になり、漢字の形態を効率よく覚えられなくなる。

→漢字を1画ずつ色分けする。

→漢字の成り立ちなど、付加的な情報も同時に伝える。

→「暗」は「日が暮れて音しか聞こえないから暗い」と言葉で意味付けする。



## 4 視覚的に順番を覚えることが苦手

視覚的な位置や方向といった時系列の情報を覚える力が弱いと、書き順が覚えにくく、絵を描くように漢字を書くため、毎回書き順が異なってしまふ。  
→書き順の学習に空書きを取り入れる。（文字には運動としての書き順の記憶も存在するため、空書きという運動としての書き順の記憶が漢字の想起を補助する）  
→書き順を「上から下」「左から右」「1・2」と声に出して書く。

## 5 手先の不器用さの問題

手指の運動発達が未熟なために正しく鉛筆が持ちにくい場合や手指の関節が動く方向が分かりにくい場合、筆圧をコントロールする力加減が分かりにくい場合、鉛筆を持つ手指から得られる触覚情報が鈍い場合などがある。漢字ドリルの小さな枠に書き写すだけで精一杯になりやすく、漢字を覚える余裕がなくなる。  
→習字のように肘や肩を動かさず粗大な書字運動によって手指の負荷を補う。  
→2Bや4Bなど、柔らかい芯の鉛筆を使用して筆圧を感じやすくすること、三角面で太めの鉛筆を使用して手指との接地面を広くし、得られる触覚情報を多くする。  
→書く量を減らす。（合理的配慮）



### とれたて直送便



☆絵本「カラーモンスター」～きもちは なにいろ？～

ある園では、子どもたちが自分の感情を整理して表現できるように、絵本「カラーモンスター」を活用していました。うれしい（黄色）、悲しい（青）、怒り（赤）、不安（黒）、穏やか（緑）と、五つの気持ちを色で示して、自分は今、どんな感情なのかを視覚的に気付くことができる絵本です。自分をコントロールだけでなく、友達の感情にも気付きやすくなります。4歳児クラスの男の子は、「今、うれしい気持ちなんだよ」と笑顔を見せながら、黄色の色紙を使って作品を作っていました。

